

奈良県国語教育研究会報

第111号

発行所 奈良県国語教育研究会
 発行人 原井 葉子
 事務局 立野小学校
 吉野郡吉野町市2298
 ☎ 0746-32-4333
 FAX0746-32-8982



国語教育の推進に向けて

奈良県国語教育研究会

副会長 中永和美

昨年四月一日、新元号は「令和」と発表されました。典拠は奈良時代に完成した日本に現存する最古の歌集「万葉集」。万葉集にある歌の序文「初春の令月にして、気淑く風和ぎ、梅は鏡前の粉を披き、蘭は珮後の香を薫らす」から二文字をとったとされます。万葉仮名には意味のある字はないと指摘されましたが、例外があったのです。それが「序文」です。

〈大和には 群山あれど とりよるふ 天の香具山 登り立ち 国見をすれば 国原は煙立ち立つ 海原はかまめ立ち立つ うまし国ぞ あきづ島 大和の国は〉とは「大和にはたくさん山があるが、香具山の頂に立ってみると、国原からは煙が立ち、食事の準備をしている。海原からかまめが飛び、そこにはたくさん魚がいる立派な国ですよ」と山からの眺めに日本の豊かさをうたっています。私が奈良の地で中央研修に参加した時のこと、各地から来られた参加者が

「奈良という地におられて羨ましいです」と言っていたことを思い出します。今を生きる私たちが大和の山を眺めると、万葉の歌人と同様の感動を覚えます。

本会は、研究主題を「付けたい力を育む『書くこと』の学習活動の創造」(実証的な学習過程の重視)として、研究委員会と作問委員会で活動を進めてまいりました。新学習指導要領の改正の概要として、知識の理解の質を高め資質・能力を育む「主体的・対話的で深い学び」が偏りなく実現され、これまでの教育実践の蓄積をしっかり引き継ぎ、子どもたちの実態や教科等の学習内容に応じた指導の工夫改善を図ることと告示されています。また、学習過程の明確化、「考えの形成」を重視するとも示されています。以上のような動向を踏まえた上で、子どもたちが自らの課題を発見し、その解決に向けて学ぶための言語活動を今後

もさらに充実させるとともに、その言語活動を通して、「実生活に生きてはたらし、各教科の学習の基本ともなる国語の能力」を育成するための授業改善を行うことを目指しております。

学習過程や指導事項について、自身が指導する子どもたちの姿に照らして焦点化・具体化し、付けたい力(資質・能力)をより明らかにした上で単元目標を設定することが重要です。そして、学習活動の中で、子どもたちから「なぜなのか」という問いを引き出し、「なぜ学ぶのか」といった学習の意義を理解させ、「何をどのように学ぶのか」といった思考・判断などを活発にする、そして「何ができるようになったのか」という学習の成果を自覚させるといった言語活動を行わせ

ることが必然であると考えました。

昨年十月三十一日、奈良市立平城小学校において開催された秋季研究大会で、研究委員会の実践研究を発表いたしました。当日は会場校になった奈良市立平城小学校の先生方に学習公開を御提供いただきました。また、広島女学院大学教授の植西浩一先生より「書く力を鍛える」という演題で御講演いただきました。そして、作問委員会は、十一月に実施した国語学力診断を集計、分析した結果を二月十三日の冬季研究大会で報告いたします。

本会の研究が、県内の国語教室で、先生方の授業改善につながる、子どもたちの豊かな、そして、確かな言葉の力につながっていくことを願っています。

冬季研究大会講師



兵庫教育大学大学院教授 吉川 芳則 先生の御紹介

神戸大学教育学部を御卒業後、兵庫県公立小学校教諭としてお勤めになりました。その後、兵庫教育大学附属小学校に勤められ、この間に兵庫教育大学大学院修士課程言語コースを修了されます。その後、兵庫県教育委員会事務局指導主事を経て、現在、兵庫教育大学大学院にて教授として勤められています。

全国大学国語教育学会(理事)、日本国語教育学会、日本読書学会、日本教育方法学会等会員、国語教育探究の会代表を務められています。

- 『論理的思考力を育てる! 批判的読み(クリティカル・リーディング)の授業づくりー説明的文章の指導が変わる理論と方法ー』明治図書、2017
- 『教室を知的に、楽しく! 授業づくり、学級づくりの勘どころ』三省堂、2015
- 『説明的文章の学習活動の構成と展開』溪水社、2013
- 『小学校説明的文章の学習指導過程をつくる』明治図書、2002 など

―冬季研究大会要項―

期日

令和二年二月十三日(木)

会場

奈良県立教育研究所

日程

12時45分～13時 受付
13時～13時15分 開会行事
13時20分～15時 分科会

「令和元年度国語学力診断」集計結果報告・学習指導法の提案及び研究協議

小学校 高学年	辰巳 彰吾 (大淀緑ヶ丘小)	高塚 力蔵 (生駒東小)
小学校 中学年	村上 雄太 (平城小)	河野 雄一 (筒井小)
小学校 低学年	間林加名子 (陵西小)	西井奈都子 (六条小)
	提案者	助言者

司会

上田 恵子(たかむち小)

指導助言

稲浦 寿子(俵口小学校校長)

15時10分～16時30分 特別講演

演題

説明的文章の批判的読みのススメ

兵庫教育大学大学院教授 吉川 芳則氏

16時30分～16時40分 閉会行事

国語学力診断に対する御意見から

本年度の「国語学力診断」は、小学校、約六万部の御採用をいただきました。また、結果集計にもたくさんのお力をいただきました。本当にありがとうございます。ありがとうございました。

児童の学力傾向や実態、国語学力診断に関してお寄せいただいた御意見の一部を紹介いたします。

〈小学校低学年〉

- ・読むことの問題文は動物の内容で子どもたちも興味をもって読んでいた。
- ・文章の内容が要約されていたり、言葉じりが変わったりしているだけで理解できない子が多い。
- ・「ほお」という言葉を知らない子がいた。語彙指導を充実させていかなければいけないと痛感した。
- ・一年生(2)では、「やわらかくて」という言葉が脱字しやすい。
- ・日付けの読み方を分かっていない子がいる。
- ・カタカナの表記で間違っ子がいた。丁寧に指導しなければいけないと思った。
- ・二年生の書くことについては、登場人物の行動を書いているだけで、様子を書けていない子がいる。

〈小学校中学年〉

- ・初めて読む文章では、文章を読むのに時間がかかる子がいる。
- ・三年生(3)問1では、文章に書かれている内容を順を追って捉えなければいけないが、できていない児童が多い。
- ・三年生(3)問3では、「どのようなか」を問われているのに、「どうしているか」を答えている児童が多い。問題文をしっかりと読む習慣を身に付けさせなければいけない。
- ・四年生(5)問1では、問題文をしっかりと読んで答えていない。
- ・漢字と送り仮名で一問ずつは少ないのではないかと。配点は大変だが、2点ずつ5問出した方が平均的に分析できるように思う。
- ・主語と述語の関係を問う問題では、できていない子が多い。
- ・書くことの問題では、「おすすめの理由」と「来てほしい気持ち」の両方を書くという条件があるが、一方しか書いている児童がいる。
- ・三のような条件がある作文をする経験が少ない。日々の授業を見直して、作文の指導をしていこうと思った。

〈小学校高学年〉

- ・どの問題もすごく練られていて、児童の学力を診断するのに適した問題になっていた。
- ・五年生(4)では、文章中の言葉を使ってまとめる必要があるが、正解する子が少なかった。

- ・六年生(6)のように、文章全体を読んで答えなければいけない問題では、答えを探すのが苦手な子がいる。
- ・丁寧語は日常生活で使うが、尊敬語や謙譲語は普段の生活で使うことができていない。
- ・「書くこと」では、資料の情報が多く、理解できていない児童がいる。
- ・「書くこと」の問題が無記入の児童が、どうして無記入で終わったのかを知る必要がある。

素材文や設問についての御指摘や御意見は、本学力診断が児童の実態を把握するために適切な診断となるよう、今後の参考にさせていただきます。児童の学力傾向や実態に基づく授業改善については、冬季研究大会の研究協議のテーマとし、また、県内の全小学校に配布する「国語学力診断結果報告書」にその資料を掲載します。御活用いただくと幸いです。



令和元年度 秋季研究大会を ふりかえって

事務局 田中 奈生

小春日和が続き、木々の葉が色づき始めた秋の良き日に奈良市立平城小学校にて、本年度の秋季研究大会を開催いたしました。

前半は、会場校である平城小学校で、低・中・高学年、特別支援学級の四学級で学習公開をしていただきました。平城小学校では、研究主題を「確かな学力を身に付け、共に学び合う子の育成」「書くこと」における児童を中心とした学習過程の重視」として、新学習指導要領を見据え、「主体的・対話的で深い学び」の視点から研究を進めてこられました。また、児童の実態から具体的に研究していくことを大切にしながら、書く力の育



成に取り組みました。

単元目標を、学習指導要領の改訂に合わせて、「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱に沿って目標が示され、言語活動も「主体的な学び」、「対話的な学び」、「深い学び」の三つの視点から捉えられた「先行実施」的な要素が多く含まれた実践でした。また、「つなぐ」をキーワードに全学年、言葉や表現を意識した学習が行われていました。

低学年では、すぐろくを使うことにより、時間の順序に着目させ、つながりのある文章を書く力を育てておられました。中学年では、人物を豊かに想像し表現した文章をシールを使って交流することで、児童は友達との表現の差異に気付き、語彙の世界を広げていました。高学年では、工夫されたワークシートを使

い、二つの資料から考えたことが根拠となつているか話し合いを通して考え、工夫して書く児童の姿がありました。支援学級では、言葉を声に出し、聞き合うことで、語彙を豊かにする実践でした。



後半は、本会の分科会が開かれ、本年度の研究主題である「付けたい力を育む『書くこと』の学習活動の創造」実践的な学習過程の重視」をめざした研究と実践の報告が行われました。

本年度は、より実践的な学習過程を重視するため、実践前後の児童の変容や、指導事項の焦点化に重きをおき、研究実践に取り組みました。特に工夫されたワークシートや、具体的な推敲の仕方が提示されたカード、モデル文など、実際に明日からの学習指導に使えるような実践が数多く明示されました。

さらに研究協議では、参加された方々と具体的実践について意見交流が行われました。

大会記念講演には、広島女学院大学教授の植西浩一先生をお招きしました。御講演では、「書く力を鍛える」という演題のもと、先生御自身の実践から書く力を育てるための具体的な指導方法について、御教授いただきました。

生徒の忘れられない言葉から御講演は始まり、「国語は実技教科である。」と国語科を指導するための重要な視点を教えていただきました。また、たくさんの書きたくなるような題材の紹介から、指導者自身が題材探しを楽しむことの大切さに気付かされました。先達に学び、学習者に学ばれる先生の姿から教えられることは数多く、自分の実践を振り返り、今後の研究的実践への意欲が掻き立てられるような御講演でした。

本研究会では、今後も研究と実践を進めていき、付けたい力を育む学習活動の創造をめざしてまいります。



「ことば」を紡ぎ合う
授業を目指して

奈良市立東市小学校 中山 さやか

子どもたちが夢中になる授業。一つのことばから懸命に考え、また新たなことばをみんなが発信していく。そんな授業を目指して国語の取組を進めてきた。しかし、どれだけ教師が研究をし、準備をしておき、子どもたちが授業に臨んでも、満点の授業はできない。教室では、子どもたちが感じるままに発表する多様な意見が予想を超えて飛び交い、計画通りには進まない。

それならばと前回よりもっと一人一人の心に響く授業を目指して再び研究を進める。この繰り返しで終わりが無い。だから授業は難しく、面白く、奥深い。日々そんなことを感じながら、国語の授業作りを取り組んでいる。今年度は、子どもたちがたくさんのことばに出会い、感じ、考えて発信することを目指してきた。そして、県国語教育研究会として書くことの研究を進める中で、目指す授業のヒントをたくさんいただいた。

ことばを楽しむには、多くのことばを読むことが大切である。クラスがスタートしたと同時に、子どもたちはたくさん詩、文学的文章、説明的文章を丁寧に繰り返し声に出して読んだ。そして、ことばから感じたことを、どんどん書いていった。書くことが楽しくなってきた子どもたちは、「もっと書きたい。」という意欲が高まる。もう少し書きたいという気持ちから、何枚も次の紙を取りに来る。得手不得手はあれ、自分なりのことばで、感じたことを懸命に表現しようとする姿がそこにある。書くことで、自分の考えが文章として表現され、それを目

にすることで自信を持つことができるようになる。その自信が原動力となって、次は自分の考えを相手に伝え広げていこうとするようになる。そんな子どもたちと作る授業は子どもたちの考えで溢れ、新たなことばを紡ぎ合い、深まりのあるものになっていくのである。このように書くことが楽しいという気持ちを大切にしながら、子どもたちは相手に伝わる文章にするため、簡単な構成を考えたり、書いた文章を推敲したりしていくことを学んでいった。

ことばの世界で生きていく私たちは、ことばから学び感じ取ったことを、ことばを通して表現し、伝えていく。そして、相手の考えをことばを通して感じ取っている。国語の授業はもちろん、子どもたちを取り巻くすべての環境において、できるだけ多くのことばと出会ってほしい。そしてたくさんのことばとの出会いを、単なる語彙力の育成に留まることがなく、ことばの持つ意味や響きを理解し、自分の思いを伝えるための手段として表現する力に繋げてほしい。ことばを紡ぎ合う国語の授業。子どもたちが感じたことを自由に表現し、心に響くことばが溢れる時間にし、一人一人の生きてはたらくことばの力を更に伸ばしていきたいと考えている。

「ことばを育てる

奈良市立平城小学校 若槻 由佳理

私は、四年間奈良県国語教育研究会で作問委員を務め、今年度は秋季研究大会で一年生の授業を公開させて頂きました。作問委員会では、児童の国語学力の実態を明らかにするために、児童に育成すべ

き資質・能力を定め、素材文の検討、問題の作成、結果分析、授業提案をしています。児童が問題を解くたびに、より深く素材文を読み取ったり、想像したり、解釈したりできるように、問題を解く過程で思考の流れを可視化できる問題の作成を目指しています。設問や選択肢の一言一句に拘り、試行錯誤を繰り返した結果、学力診断が完成します。その過程は、時には厳しく重荷に感じることがありますが、先生方と対話しながら、主体的に取り組むことで私自身深い学びができました。多くの先生方に助言を頂いたり、実践を交流したりする時間は、日々の授業を見つめなおすことができるかけがえない時間となりました。

秋季研究大会では、「書くこと」の授業を公開しました。平城小学校では、平成二十九年度より研究主題を「確かな学力を身に付け、共に学び合う子の育成」「書くこと」における児童を中心とした学習過程の重視」とし、研究を進めてきました。児童の事実から具体的に研究していくことを繰り返す中で、授業を見る視点、研究する視点が明確になり、日々の授業に生かすことができました。「一時間、一単元の授業で児童は何をどのように学び、どのような資質・能力を身に付けることができるのか」を常に自分自身に問いかけ、児童一人一人の姿から丁寧に見取ることを意識してきました。

また、研究授業を公開するにあたって次の二点を大切にしました。一点目は、文種を明確にし、書く内容を確実にもたせてから書かせるということです。本単元では、経験したことを友達に伝える報告文を書くという言語活動を設定しました。単元の導入時から継続

して学習シート「作文のたね」を使い、題材集めをしました。また、「作文のたね」を交流し、詳しく知りたい出来事や興味をもった出来事を伝え合う時間を設けました。そうすることで自分の「伝えたい」という思いだけでなく、友達の「知りたい」という思いにも気付き、伝える相手、目的意識、そして書きたい内容をもたせた上で作文を書かせることができました。

二点目は、ことばとよい出会いを仕組むということです。新学習指導要領においても、「語彙指導の改善・充実」が求められています。語彙の量と質の両面から充実させるために、「ことば集め」や「しりとり」、上位語・下位語、人柄や感想を表す言葉などの掲示を継続的にしてきました。教室の中がたくさんのことばであふれ、自然と意味を知ったり違いに気付いたりできるように、今後も継続して言語環境を整えていきたいです。

国語教育研究会でも、秋季研究大会でも非常に多くのことを学ぶことができました。「ことばを育てるといことは心を育てること 人を育てること 教育そのものである」という大村はま先生の言葉にもあるように、今後も児童に豊かなことばを育てられるよう、日々学び続ける教員でありたいと思います。

編集 後記

この度は、学力診断採用ありがとうございました。今後も、県内の国語教育の動向を知る情報紙として、紙面の充実を図っていきたいと思います。御示唆、情報等おありでしたら事務局までお知らせください。(田中)